

〈図書紹介〉

『大学でのピア・サポート入門 始める・進める・深める』 春日井敏行・増田梨花・池雅之編著 ほんの森出版 2020年

立命館大学大学院教職研究科2年次生 桑野 怜奈

2020年度は新型コロナウイルスの流行により、教育現場におけるオンライン体制の整備が急速に進められてきた。このような状況下で、新しく大学に入学してきた学生のなかには、友人ができないことや履修の方法、生活費を工面するためのアルバイトなど、様々な面で不安を抱えていた人も多い。実際に本学においても、春学期の授業はすべてオンラインで行われたため、約半年の間入学してきたM1と対面で顔を合わせる機会は得られなかった。

このような状況だからこそ、本書の「ピア・サポート」という言葉が、今後の新しい学生生活の中でより重要になるのではないだろうか。本書は、「入門編」「実践編」「理論編」の三部構成となっており、それぞれ「始める」「進める」「深める」をテーマにしている。3部全体を通して19名の執筆者が4～6ページで内容をまとめているため、簡潔に重要な要素がまとめられており、読者の興味関心のある分野から読み進めていくことが可能である。

第1部「入門編」では、ピア・サポートとはどのようなものか、ピア・サポートに求められることは何かといったことが示されている。本学でのピア・サポート活動として「オリター団」という上級生による下級生のサポート組織についても紹介されている。私自身、学部一年次ではオリターの先輩方による「サブゼミ」という同じクラスでの交流企画によって履修の組み方を教わったり、友人と交流を深めたりした経験がある。初めて顔を合わせる人たちと仲良くなるためのきっかけづくりとして、このようなピア・サポート活動は大変有効であったと実感している。第1部では今後現場でピア・サポート活動を支える教員として意識すべき視点を知ることができた。

第2部「実践編」では、執筆者らの勤務校におけるピア・サポート活動の実践が紹介されている。本書で紹介されている大学でのピア・サポート活

動は、主に教授らによる企画から始まり、次第に学生の自主的活動へと数年間をかけて変化している。なかにはピア・サポーターを育成するためにサポート側の学生が段階的に活動に参加できるプログラムや、カウンセラーが活動の顧問となっている大学もある。いずれの学校においても、どのような役割を果たすためにピア・サポート活動があるのかが明確であり、各学校の特色に応じたピア・サポートの在り方を考え続ける姿勢の重要性を感じた。

第3部では、「ファシリテーション」や「スーパービジョン」、「ポジティブ心理学」といったキーワードとピア・サポートの関連性を示している。ピア・サポーターとしての姿勢やスキルだけでなく、ピア・サポート活動をどのように指導者側が支えていくのかについても述べられている。第3部内での海外の大学におけるピア・サポートプログラムを導入するためのガイドラインは、日本の大学だけでなく小学校から高等学校においても活用できる部分があるのではないだろうか。

「まえがき」に、日本におけるピア・サポートの理念は「困ったときはお互いさま」という言葉ではないか、と提言されている。現在、新型コロナウイルスの流行により、日本の多くの人がどこかの場面で「困った」を感じている。社会の影響が大学生だけでなく多くの子どもの良い面でも悪い面でも影響を及ぼしている中で、このピア・サポートという考え方は、私たちの周りにはいる子どもの「困った」を解決する方法の一つとして有効であると感じている。大学関係者だけでなく、子どもの居場所をどのように作ってあげようのかを考える人々にとっても、気づきのある一冊である。

